

## ロックの信仰論における理性の役割と限界について

遠藤 耕二

### はじめに

ジョン・ロックが展開した数々の哲学的議論には「信仰 (faith)」に関わる問題も含まれているが、その議論は宗教的な関心を持たない人々にとっても極めて興味深い内容を持っていると言える。例えば彼は『人間知性論 *Essay concerning Human Understanding* (以下『知性論』)』の中で信仰は人間が持つ「理性 (reason)」による知的活動との関係性の中で語られるべきであるとし、「狂信者 (enthusiasts)」による信仰が信仰の本質から外れていることを強調している。また、『寛容についての書簡 *A letter concerning Toleration* (以下『書簡』)』の中で彼自身が展開した信仰の自由に関わる主張からも窺い知ることができる。その中で彼は神の真理に対する個人の信仰が他者による信念の強制や働きかけによって操作や強制を受けることができないという点を強調している。

ではそもそも彼にとって信仰は正しい信仰や個人の信仰の自由とどう結びつくのだろうか。この点を考えるに当たって、我々は理性がどのような役割を担っているのか、という点から目をそらすことはできない。本論では『知性論』における信仰論と『書簡』における信仰論との比較を交えつつ、彼の信仰論における理性の役割と意義について論じたい。なお、『知性論』本文から引用については、引用元を文中で示すものとする。

### 1. 予備的な考察—信仰の独立性と不可侵性

『知性論』では信仰は「決して理性の演繹によって作られたものでない、しかし命題提示者の刻印によって、ある異常な仕方での伝達の中で神からもたらされたようなあらゆる命題に対する同意 (assent)」(*Essay concerning Human*

*Understanding*, IV, ch. 18, p. 689) と定義されている。同意とは彼によれば蓋然性の高い命題を事実なものとして受け止める知性の機能である。同意は信念や臆見や判断、意見と同じ位置に置かれ<sup>1</sup>、確実性を持つ演繹的な思考と区別されるものとなる。その意味において信仰は演繹的なものというよりは、むしろ推測的な思考と言うべきだろう。

また、信仰は個々人の独立した知性とも結びつけられ、衝動的な信仰や他者からの操作によって押しつけられた信仰とは全く対立したものと見なされる。この立場は『知性論』のみならず、『書簡』の中で重視する宗教への寛容にも反映されている。ロックは、『書簡』の中で個々人の信仰に国が介入することへの否定的な見解を、以下の理由でもって示そうとする。「魂への配慮は、いかなる他人にも委ねられない以上に、為政者 (civil magistrate) にも委ねられないからです。(…) どのような信仰告白をし、どのような外面的な礼拝をしようとも、それが真実であり、神の御心にかなうものだと我々のうちで完全に納得される (satisfied) のでなければ、そうした告白や礼拝は我々の救済に役立つどころかかえって障害となるのです」<sup>2</sup>。Nicholas Jolley も *Locke his philosophical thought* の中で、ロックにおける信仰について次のように述べている。「ロックはそこ(『寛容についての書簡』)で、信念は我々自身によって自発的にコントロールできないがゆえに、脅迫や強制あるいは誘導 (inducement) によって影響されるような類のものではない、と述べるのである」<sup>3</sup>。

ただし誤解のないように言うならば、両者における宗教に対する視点は異なっている。前者が哲学的・形而上学的な立場から信仰について語っているのに対し、後者においては信仰のあるべき姿や自由を政治的な合理性という視点から理解するよう促すものとなっている。しかし他方において、信仰に対するロックの立場が両者の中で一貫しているのは確かである。それは彼の構想する信仰が、他者によって決して操作され得ないという哲学的な確信を基盤としているということである。

そこで我々がロックの信仰論に関して考察する点は次の通りである。まず一つは、信仰、特に神に関わる真理への信念はロックにおいて意志的活動とされ得ないという点である。確かに信念が単なる願望や印象と異なるのは理解できる。だがもし信念が意志と区別されるのだとすれば、信念を獲得するメカニ

ズムは一体どのようなものなのだろうか、ということになる。そしてもう一つは、信仰の自由は自由を盾にした個人の独断を招くものでない、ということである。現代社会においても新興宗教に代表される宗教団体が多く存在している。無論彼らの自由は公共の福祉と衝突しない限りは尊重されるべきだが、一方でそこには狂信や他の宗教との関係という問題がつきまとう。『寛容』では既にこうした事態に対するロック自身の回答はある程度納得した形で提出されているものの、それはあくまで政治的な領域での解決策に過ぎないが、一方『知性論』では誤った信仰、つまり狂信の有害性が哲学的な文脈において明確に指摘されている。

この二つのポイントに対して考察をすることこそが、ロックにおける信仰を理解する上で求められるはずである。

## 2. ロックにおける信仰

### (a) 理性の役割

多くの人々は信仰、あるいは宗教への帰依の中で何かを信じていることがいわゆる意志的行為と異なると聞くと奇異な印象を抱くに違いない。しかし実際に信念について詳細に考察すれば我々はそれが他の知的な活動と異なる様相を持つことがわかるだろう。

そもそもロックにとって神への信仰は「理性 (reason)」から独立し得ないものとされている。理性は人間における論理的思考、例えば推論と「中間観念 (intermediate idea)」すなわち、われわれの内なる「単純観念 (simple idea)」を連結し、関係付ける観念を司ることによって、人間の認識活動をより論理的かつ一貫したものにする。ロックの認識論では、我々は外界からの事物を単純観念として知覚し、そして知性を通じてその観念が対象と一致するか不一致であるかを個々の経験から学び取り思惟し、その一連の一致不一致の知覚を「真知 (knowledge)」として我々自身の心の中にとどめるとされている。言うなれば我々は感覚によって観念を得、その観念の正しさや間違いを真知によって照合するというわけである。したがって、「真知と矛盾するものを我々は理解することはできない」<sup>4</sup>し、逆にこの真知が確実な正しさを持つならば、感覚の誤りや錯誤はそれ自体において我々の知性の確実性を脅かすものとはならない。

更に我々の心は、蓋然性の高いつまり確実に真であると断言できないような命題に対してはその命題が我々の真知と一致するのかどうかを「判断(judge)」するという機能を有している。この判断を言語レベルで行うのが先に示した「同意」である。真知が演繹的な存在とすれば、同意は言うなれば推測的であると言えよう。

ところでこうした知性の持つ働きは意志的な行為と区別されるものとして位置づけられる。真知を恣意的に持つことは不可能ではないが、基本的に真知は感官による観念の受容によって規定されるものであり、感覚したものと別のものを真知として蓄えることはできず、ゆえに有意的とは必ずしも言えない。一方同意は心の一つの機能に過ぎず、単なる意志的行為とは区別されるものである。心の機能についてロックは次のように述べている。「我々の知るところで有意的なのは、ただ我々の機能のどれかをあれこれの種類の対象に働かすか、あるいはこれを差し控えるかである。(中略)しかし機能が働けば、我々の意志は心を知るのを一つの仕方あるいは他の仕方決定する力能を持たない」(IV, ch. 13, pp. 650-651)。

とは言え、真知と同意は通常相反するものである。通常演繹的思考を行うには、人は確実かつ真の論拠を立て、そこに含意され、なおかつ確実に導出される結論を考えねばならない。一方同意においては自分が信じている対象とそれ以外の対象との間に確実な関係が想定されているわけではない<sup>5</sup>。前提と結論との関係は論理的法則の問題と言うよりはむしろ経験の問題となるからである。それゆえ我々は結論と論拠とが結びつくかどうかを様々な証拠を元に推論し、判断に関わる心の機能を制御する必要がある。ここで問題となるのが理性の働きである。理性は「真知では絶対的な確実性を見出し、同意では蓋然性を発見する」(IV, ch. 17, p. 669) 機能であり、この理性なくしては我々は観念と対象との関係を見出すことができない。

理性は論理的な思考を司り、我々が観念と対象の関係あるいは観念相互の関係について演繹するか同意するために重要なものとなる。感覚は真知を生み出すが、その真知が対象と整合性をもって結びつけられるのは理性の力のあるところが大きいのである。これはともすれば我々にとって非合理に映りやすい信仰も、理性によって異なる様相を持つものとして位置づけられることを意味

している。

### (b) 信仰における理性の登場

次に我々は信仰と理性という一見相反する両者のつながりを見る必要がある。というのも理性が論理的思考や我々の認識の真偽に大きな力を発揮するものであるとするならば、我々の理解や感性を超えるものとされる神への信仰について理性が果たすべき役割をロックがどのように理論化したのかを探らなければならないからである。

『知性論』では神の存在は決して疑い得ないものであるが、一方で神は我々が神についての存在を証明するために必要な心の機能を有するよう創造された、と述べている。そして彼によれば神の存在は「理性の発見するもっとも明瞭な真理」(IV, ch. 10, p. 619)であるが、その明証 (evidence) は直観的な真知から演繹されるものでなければならないものともされている。こうした点からロックの信仰に対する態度が見えてくることだろう。

ロックが同意の対象である信仰に関わる命題が「啓示 (revelation)」という形を持って我々に経験的にもたらされるとしたことは第1節の冒頭で述べた通りだが、その啓示は基本的に「伝承的な (traditional)」啓示と神によって明らかにされた「本源的な (original)」啓示とに区分されるものである。その中でロックは、伝承的な啓示、例えば聖書で語り継がれていた伝承が真実であるか否かは、今生きている我々が確実に知ることができないと述べる。というのも、それは人々の間で言葉によって語り継がれる分、我々自身によってア・プリオリに真なものと知られないからである。その例としてあげられるのは聖パウロが第3の天まで引き上げられたことについての伝承である。聖パウロが天に引き上げられたとき彼自身が得た単純観念は、他の人には知られることはない。仮に知られたとしてもそれは超感覚的なものであるので、我々がそれを真知として獲得できるわけでもない。伝承的啓示は文書や口伝といった言葉によって伝えられるものの、言葉は「自然の音の観念以上の観念を生ま」(IV, ch. 18, p. 689)ず、当時の人々が経験した啓示や奇跡についての観念をそのまま映すものではないのである。

「してみると、我々の単純観念は我々すべての思念・知識の根底であり、唯一の素材であるが、この単純観念のために我々は自分の理性に (…) 依存しな

ければならず、単純観念を、あるいはそのどれかを、伝承的啓示から受け取ることは断じてできないのである」(IV, ch. 18, p. 689)。

一方、神によって示された本源的な啓示は、神によって最初に人間にもたらされるものであり、その啓示を発した神が「欺くことも欺かれることもできないようなお方、つまり神ご自身の証言である」(IV, ch. 16, p. 667) がゆえに、「疑惑を超えた確信、例外を超えた明証を伴う」(IV, ch. 16, p. 667)。本源的啓示は人間の人為性を超えて直接命題を我々にもたらすという点において我々の持つ真知や観念と確実な関係を伝承以上に持つのである。『知性論』では神の存在は疑うことのできない真知となり、基本的には演繹の対象である。それゆえ神より直接得られた本源的啓示は伝承的啓示とは本質的に性質が異なり我々にとって決して疑い得ないものとなる。

では啓示に対して理性はどのような役割を果たすのだろうか。ロックは「人間は、自分自身に成されたこととされる直接的かつ本原的な啓示でさえ、理性を使い、理性に耳を傾けるべきである」(*Essay*, IV, ch. 18, p. 689) と述べ、「信仰は、理性の誰にもわかる明晰な指令に反対する権威を持たないのである」(*Essay*, IV, ch. 18, p. 689) と指摘している。だが、「理性に耳を傾ける」と言っても、そもそも理性そのものが信仰の防波堤として、あるいは裁判官として機能するということの意味するわけではない。ロックはあらゆる命題について理性が言うことすべてについて耳を傾けるべきであると言っているわけではないのである<sup>6</sup>。理性が行うべきは、あくまで自分自身の真知によって啓示が神から与えられたものであるかどうかを推定することである。ロックは真知における観念の一致・不一致の知覚が命題的なものとしており、それゆえ啓示という命題において真知の役割が重要なものとされるのである。

一方、理性によって啓示が捉えきれない場合、啓示の是非は信仰の問題となる<sup>7</sup>。つまり、その真知に収まらない啓示については、あくまで確かな明証を用いて蓋然的に我々が信じる他ないからである。無論そこでは我々が持つ確実な知識や理性の原則を否定しないという但し書きが付くものの<sup>8</sup>、啓示が常に我々の想像を凌駕するものである以上、信仰は理性との照らし合わせを常に要求するわけではない。そもそも我々に与えられた啓示が本当に神から与えられたものかどうかを決めるという理性の役割は、少なくともその啓示が確実に

我々にとって絶対的な真である時には与えられないのである<sup>9</sup>。神は決して疑い得ないからである。

『知性論』で展開される以上の主張は、言うなれば理性の存在の再確認であり、それと同時に信仰における様々な宗教的特徴を認識論的な地平に立たせるものでもある。その一方で、信仰と真理とを無前提に直結しないものの、神によって啓示された命題の真理に対して理性が踏み込むことができない領域があると認める点を認め、信仰の問題における理性の限界をも規定するものとなっている。ともあれ信仰が恣意的なもので決してないとする彼の主張は、理性という契機を得ることで、信仰の独立性と自由を確保するものと言っても過言ではないのである。そこで次節では理性による信仰の確実性についてより深く検討することにする。

### 3. 信仰と真理

#### (a) 同意と真知

理性は信仰にとってなくてはならない存在であるが、常に一貫して信仰を制御する権限を持つわけではない。信仰と理性の間にはこうした複雑な結びつきが存在するのである。しかしこの点が更に示すのは、人間にとって信仰が個人において独立的である一方で、単に理性的な思考のみでは対処しきれるものではなく、むしろ個人個人の自発的行動とは異なるものによって存立しているという点に他ならないのである。次に我々は先の信仰の定義でも触れた同意について、そして理性が啓示に同意する上で参照する「真知」について目を向ける必要がある。

我々は確実な認識において真知の存在を必要とし、その真知を組み合わせ、推論に適用するのが理性である。基本的に知られている解釈に沿うならば、「真知はある事実気づくこと (awareness) であり、それに対して信念あるいは同意は事実であると受け止める何かである」<sup>10</sup>。従って、我々が何かを信じ得るのはそこに事実があるとされるからであり、その信念が確実であるにはそれだけ我々には確実な真知が必要とされる。また一般的な解釈に従えば、信じることと真知を持つことの間には明確な区別がある。基本的に同意の根拠は恣意的なものにもなり得るが、真知は確実性に則ったものであり、経験が即真知に

つながるというものでもない。ある何かを信じるのが直接的に我々にとって確実性を持った知識となるとは限らないことは容易に理解できるものである。「明日晴天に見舞われること」への信念は、その真偽が問われ得るのだとしても、信念を持つ段階において晴天に見舞われることへの確実な事実を保証するわけではない。

だがそれでも信じることは我々の外界に対する思考活動においてなくてはならないものである。我々は外界すべての対象への観念の一致について確実な真知を得るわけではないからである。「したがって、蓋然性は私たちの真知の欠陥を補い、知識が誤ってしまうような場所を導いてくれるものである」(IV, ch.15, p. 655)。我々は決して無根拠な形で信念を持つわけではない。たとえ明示的でなくとも無意識的な形で我々はある種の信念を保持し、その信念がある種の確実性に基づいていることを知っている。我々は「(少なくとも一神教的な文脈で語られる) 神なんて存在しない」という信念を持つことができるが、それは神に対する非認識や無感覚によってそう確信しているからである。しかも我々は明確な意志によってそう信じるというよりは、その非存在の認識を通じて我々は自分がどれほど神の非存在を信じ、逆に神の存在を信じていないかを知るのである。この立場から見れば、同意については次の点のことが言えることになる。それは我々はある信念を持つことを信念を持つかどうかの決断によってでなく、その信念を持つ根拠となる観念を得た結果において生み出しているということである。

2節(a)で述べたとおり、我々はある仕方でも同意したのとは別の内容の同意を任意に切り替えることができない。それは一端確実な知覚を通じて得られる真知を変更することができないのと同様である。Nicholas Wolterstorff は *The Cambridge Companion to Locke* の中で、真知は同意の一種 (a species) であるという見方を提示しているが<sup>11</sup>、それは何より真知と同意とが互いに異なる性質を持つものの、決して対立的ではなく、むしろ連続したものであるからである。

真知は観念の一致や不一致の知覚によって生み出されるものであり、我々が認識し、理性的に思考する限りにおいて真知の存在は確実かつ疑い得ないものであり、それゆえ恣意的な選択の対象とはならない。三角形についての真知は、三角形についての全く逆の真知を含まないからである。ところで同意は真

知の範囲から外れる観念の一致・不一致が存在する場面において真知の代わりに心によって生じるという意味で補完的である。我々は何か「信じる」ということをあたかも自発的なものと捉えやすいが、もし信じること、つまり同意が我々の知性の活動において必然的に生じるものであるとすれば、同意もまた恣意的なものではないと言えないだろうか。事実、ロックは次のように述べている。「真知は知覚以上に任意だというわけではない。かくして私は同意は真知と同様に我々の力能にないと考える」(IV, ch. 20, p. 717)。

三角形の三つの角と二直角が等しいことを自分で確かめず信頼できる数学者の断言を通じて信用する人間は、それは彼が三角形に関する両者の関係についての他人に真実性を見出し、受け入れているからである<sup>12</sup>。このような信念について、それが単にその人が意志的にそれを選択したと考えるだけでは不十分だろう。確かに我々は「何かを信じよう」と意志的に信念を持つように発言することで、信じるのが意志的な行為であると考えられる。しかし実際のところ我々が何かを信じられるのは観念の一致と不一致についての判断に有無を言わせぬ何か作用しているからに他ならない。その何かは同意に必要な蓋然性である。ロックは蓋然性という言葉で「薄明かり」に喩えているが、確かに『知性論』では、我々は蓋然性の持つ根拠以上のものについて同意を得るものとはされていない。むしろ我々の心が真知を補う形で蓋然性に同意するかどうかは問題となる以上、蓋然性の根拠が強ければ強いほど、我々の心に同意を生みやすくなる。権威ある数学者の断言を信じてしまうのは、自発的に信用するかどうかを選択したことによるのではない。数学者は真知以上のことは断言しないのだから、その断言の持つ信用の高さは十分すぎるものである。それゆえ、数学者の断言は我々の心に同意を生む大きな作用を及ぼすのである。我々が何かを信じていると言えるのは、そう信じていると「自分自身気がついている」からであって、信じようと決意した結果そうなった、というわけではない<sup>13</sup>。むしろ同意は我々にとって有無を言わせぬ「何か」が作用することによって心の中に生じるということに他ならないのである。

しかし、同意は個々人にとって必然性を伴う固有の心の作用であるにしても、それが同意の有意性との対立と矛盾するものでないということは強調しておくべきである。同意は各自の真知と観念に規定されるが故に、決して他者と

均一にならないからである。だからこそ信念などに代表される同意はロックにとって寛容の根拠として位置づけられるのである<sup>14</sup>。

### (b) 真知の確実性

しかしこうした結論を出す、別の疑問が生まれてくるかも知れない。つまり同意、つまり信念が選択の問題でないとすれば、誤った信念は正しい信念とどう異なり、またそのことは信仰においてどういう意味を持つのだろうか。

真知の獲得には個人差や物理的限界が存在する。真知は基本的に感覚的に得られるものなので、その感覚に個人差や限界がある以上、万物すべての観念についての真知を我々は得ることができない。日の当たる場所で我々は感覚的にもものを認識できても、まばゆい光を凝視してその光を認識することはできない<sup>15</sup>。しかしその真知の真偽は真知の獲得の限界にもかかわらず独立である。つまりそこから我々は、真知を持つ(=何かの事実に気づく)ということそれ自体と、真知の真偽そのものを区別する必要があることに注意しなければならないのである。我々が真知を持ってない、つまり何かを知らないでいるということは、それは私が対象に気づくことなく過ぎたこと以上のものでなく、そのことが真理性の存在を左右することを決して意味しない。それはまばゆい光を凝視することは不可能だが、かと言ってその光の存在を否定することはできないことからわかるように、また Wolterstroff が例に出すように、制限速度の標識を知らずにスピードを出してしまったからといって、それが私がこのことで責められることを拒否する理由にならないのと同様である<sup>16</sup>。一方我々が確実な真知を獲得しているとき、否応なくその真知は真理性を表したものとなるのである。

こうした真なる信仰が個々人の恣意的な選択を超えたものであるという主張は、『書簡』では一貫したロックの態度となっている。ロックは「いったん真理自身にまかされれば、おそらく十分上手く働くものなのです (would do well enough)」<sup>17</sup>と『書簡』の中で述べているが、これは健全な信仰が個々の人間が何らかの形で勝手気ままに何かを信じる、という一般的なイメージとは相反する主張である。むしろ我々が真理を掴むことにより、真なる信仰を拒否して偽りの信仰を疑いもなく受け入れることはできない、ということを示してい

る。

以上のような確実性を持った真知の「有無を言わせぬ」認識への影響は逆説的ではあるが、信仰や同意の独立性と個人性を支持するものとしてロックの主張に表れている。信仰は何より個々人の知覚と同意によって成立するのであり、その信仰は確実な真知と理性による論理的な思考なくしては不可能である。しかし確かな信仰において真理は自然と信仰者の内に根付くものであり、他者の強制を伴う必要はない。かくして個々人の信仰の不可侵性は合理的信仰と真理の絶対性によって補強されるのである。

#### 4. 信仰の不可侵性と自由

##### (a) 自由な信仰と狂信

信仰と理性との関係は、正しい信仰は神をめぐる真理との必然的な関係を保証するのであり、それゆえに我々の信仰には真理の受容に対する選択というものは存在しないという主張につながっていく。これは「自由な信仰」という面においてはどうか。

尋常でない仕方与えられる啓示について我々はそれが自分たちの真知を超えた確信が持てない場合も同意せざるを得ない。となると、我々が神への信仰の中にあるならば、我々は啓示を信じない、あるいは偽りの信仰は信じるといった選択肢は得られない。ロックは同意に自分が受け取ったものとは別の命題のように扱う能力を認めていないのである。我々に可能なのは自らに与えられた啓示の真実性に対する熟慮であり、一度信仰した内容を任意に変更することは出来ないのである。これは自律の思想と重なるものであるとも言えるが、その根底に人間の心の機能を有意的行動と区別する決定論的な側面があることは忘れてはならないだろう。

我々は蓋然性の高い命題に対して理性を通じて同意を拒否することができる<sup>18</sup>ものの、それはあくまで蓋然性のある命題を真知を通じて合意することによって可能なものであり、そのことが保証されているならば、我々にとって信仰に対する意志の自由は問題とはならない。このような偽りの信念や信仰に対するロックの立場は、誤った信仰、そして狂信が真理とはほど遠いものである、とする彼の立場を強固にするのである。事実、『知性論』は第2版以降「狂信者」

と呼ばれる人たちの問題点を論究する箇所に多くを割くようになっている。

彼らをロックが問題視する理由の一つには、信仰から理性を切り離し、自身の信念のみをもって自分が信じる啓示の確かさを主張するという点が挙げられる<sup>19</sup>。無論闇雲で根拠のない信念が正しい信念とは限らないということはおおよそその人なら理解できるだろうが、ロックは信仰が我々自身の真知と結びつくことを求めるため、そのために必要とされる理性を欠いた信仰は単に憶見と変わらないものとして映るのである。更に忘れてならない点は、正しい信仰が実証と思考の産物であるのに比べ、狂信者による信仰は自分たちの信仰が何においてもあらゆる宗教的な現象に合致するのだという想定の下に成り立っているということである。狂信者が同意したがる命題は、それが神からの啓示によって与えられたものであるという明証を持つことができない。あくまで彼らは自分たちがそれを信じているからこそ神からの啓示であると主張しているにすぎないのであり、与えられた啓示がどのようなものであるかを判断することができない<sup>20</sup>。つまり「我々が信じているから真実である」と言う一種の論理的循環に陥っているということになる<sup>21</sup>。

したがって、狂信者による信仰は確かに強固ではあるが、その信念は神の啓示との関係に理性を挟まないがゆえに啓示を通じて得られた命題への正しい同意を行うことができない。そして狂信と正しい信仰との間の最も大きな差異は、前者が神の啓示に対する自らの無謬性を頑なに主張するのに対し、後者においては、神の啓示が果たして本当に神からのものであるかどうかを自らの認識や知性との関係から導き出すことが重要なものとなるということである。

ロックの狂信者に対する強い批判は、彼らの狂信にその宗教が抱える危険性を見ているからだろう。彼は『知性論』18章の最後で理性に対抗して信仰を叫ぶことそのものが宗教の抱える不合理に帰せられるとして次のように述べている。

「というのも人々は、どんなに常識や人々のすべての知識の原則そのものに明白に矛盾しようと、宗教上の事柄については理性に相談してはならないという、そのような説を原則としたので、自分たちの空想や自然的迷信を解放し、それら空想や迷信によって宗教上きわめておかしい説や常軌を逸した実践に導かれてしまい、(…)まじめで善良な人々はそうした人々を滑稽かつ不快と考えら

れるのを避けられないのである」(Essay, IV, ch. 18, p. 696)

狂信を本質的な部分で信仰と区別するためには、信仰の合理性と狂信の不合理性が強調されねばならなかったのである。

#### (b) 残された問題

とは言え、こうした狂信に対する批判や信仰論がどこまで妥当であるかについては議論の余地が残るであろう。

まず宗教における理性が受け持つ役割には必ずしも明確とは言い難い部分が存在する。ロックは理性では捉えきれない啓示の存在を認めているが、一方で理性の宗教における地位も強調している。しかし、理性は絶対的に啓示の真実性を判定するものではないので、理性がどのようにして啓示を判定するのかという問題は、実際には演繹と推測という論理的な側面を脱してはいないのである<sup>22</sup>。また信仰の構造上理性に重きを置き続けるがゆえに、ロック的な信仰論は既存の宗教における合理的な思考のできる信仰者を想定することはできても、信仰における合理的でない部分、例えば感情が信仰にもたらす様々な影響について明確な解答となっていないとも言える。

結果としてロックの提示する信仰は、既存のキリスト教的価値の堅持を前提としたもの以上の意味を付与しがたいものとなっている。個別の同意と理性が信仰において不可欠とする立場を単なる個人の独善的な宗教観と峻別するには、キリスト教的神の存在が我々にとって自明であり、個々人の信仰がそうした既存の宗教的価値と相反するものでない、とする立場を確保しなければならないからである。

ロックの信仰論は、正しい信仰が個人的なものとして可能であり、それが真理と矛盾しないという点を明確に主張する。それゆえ信仰論という視点から評価する場合、彼がその根拠として位置づける理性そして真知という存在について何処まで妥当性を見いだせるかが重要となってくるのである。

#### さいごに

昨今我が国においても、教育や道徳の視点から宗教との関わりを問い直す

動きが見られるようになっている。しかしその中で是非とも忘れてはならないのは、人間が持っているであろう信仰や信念の持つメカニズムやその意味について理解を深めることである。ロックにおいて信仰は確かに宗教において不可欠であるが、それ自体が持つ価値は、最終的にはその信仰がどのような過程で行われているのかによって左右されるものとして定義されている。信仰は我々の認識能力を超えるものに向けられるが、実際の所、我々の認識能力の限界の中で何を信じるべきかという問題でもある。

その上で我々が理解するべきは、理性の持つ役割と限界である。ロックが信仰という文脈で理性を捉える場合、そこでは信仰がおおよそ自己の独善に陥らないよう努めるための防護として機能するが、こうした理性と信仰との関わり合いは、理性がすべてにおいて強い主導権を持っていると主張するためのものでもない。

ロックが展開した信仰における理性のあり方は、信じることに對する人間の持つ本質的な性質を見る上で一つの手がかりとなることだろう。

## 脚注

- <sup>1</sup> Cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, ed. by Peter H. Nidditch, Oxford University Press, London, 1975, IV, ch. 15, p. 655.
- <sup>2</sup> John Locke, "A Letter concerning Toleration" in "the Works of John Locke Vol. VI," Scientia Verlag, Aaren, 1963, p. 10f. (生松敬三訳「寛容についての書簡」大槻春彦責任編集『ロック・ヒューム世界の名著 32』1980年 中央公論社 所収 354頁)
- <sup>3</sup> Nicholas Jolley, *Locke his philosophical thought*, Oxford University Press, New York, 1999, p. 192.
- <sup>4</sup> J. T. Moore, "Locke on Assent and Toleration," in ed. by Richard Ashcraft, *John Locke: Critical Assessments Vol.2*, Routledge, London, New York, 1991, p. 184.
- <sup>5</sup> Cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, IV, ch. 15, p. 655.
- <sup>6</sup> Nicholas Wolterstroff, *John Locke and the ethics of belief*, Cambridge University Press, New York, 1996, p. 91f.
- <sup>7</sup> Cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, IV, ch. 18, p. 693.
- <sup>8</sup> Cf. *ibid.*, IV, ch.15, p. 695.
- <sup>9</sup> Cf. Jolley, *Locke his philosophical thought*, p. 189.
- <sup>10</sup> Nicholas Wolterstroff, "Locke's Philosophy of Religion," in ed. by Vere Chappell, *The Cambridge Companion to Locke*, Cambridge University Press, New York, 1994, p. 177.
- <sup>11</sup> Cf. *ibid.*, p. 177.
- <sup>12</sup> Cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, IV, ch. 15, p. 655.
- <sup>13</sup> Cf. Wolterstroff, *John Locke and the ethics of belief*, p. 105.
- <sup>14</sup> Cf. Moore, "Locke on Assent and Toleration," p. 185.
- <sup>15</sup> Cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, IV, ch.15, p. 652.

<sup>16</sup> Cf. Wolterstroff, *John Locke and the ethics of belief*, p. 105.

<sup>17</sup> John Locke, "A Letter concerning Toleration," p. 40.

<sup>18</sup> Cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, IV, ch. 15, p. 656.

<sup>19</sup> Cf. *ibid.*, IV, ch. 15, pp. 704-705.

<sup>20</sup> Cf. *ibid.*, IV, ch. 20, p. 702f.

<sup>21</sup> Cf. Jolley, *Locke his philosophical thought*, p. 190.

<sup>22</sup> Cf. John W. Yolton, *John Locke an introduction*, Basil Blackwell Ltd, Oxford, 1985, p. 89.

## 文献

John Locke, *Essay concerning Human Understanding*, ed. by Peter H. Nidditch, Oxford University Press, London, 1975. 訳出にはジョン・ロック著、大槻晴彦訳『人間知性論』（岩波書店、2004年）を参照した。

（えんどう こうじ／広島文教女子大学）